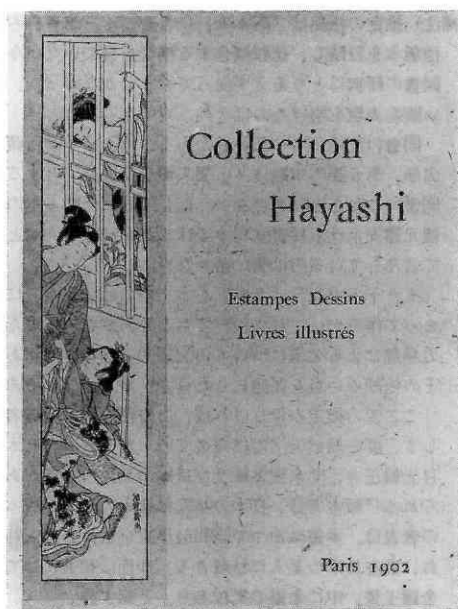


1902・03年 パリ

『林コレクション売立て目録』全3冊

— 東西美術交渉の一断面 —

教養部助教授 岸 文 和



1902年1月27日から2月1日まで、ルプルチエ街11とラフィット街16にあったデュラン＝リュエルの店で、巴里の東洋美術商・林忠正のコレクションが売立てられた。コレクションはあまりに膨大なため、浮世絵版画については、同年6月2日から6日まで、オテル・ドルオー7番室で、改めて売立てが行なわれた。林は十年以上続けてきた美術商の仕事を「縮小」することを決意したのだ。売立ては、翌1903年2月16日から21日まで、オテル・ドルオー7・8番室で、もう一度行なわれた。林をとりまく状況が変化し、彼は佛蘭西から完全に「撤退」することを余儀なくされたのだ。この二回の売立てについて、日本美術の愛好家であったレイモン・ケクランは、次のように記している。

「1902年と1903年に、林の売立てがおこなわれた。一商人の店じまいの売立てが成功す

ることは稀である。“店の残り滓”と人々はよく言ったものであるが、この場合はあまりにも品物が美しかったので、第1回も、そして2回目も成功はすばらしいものだった。これまで、彼は自分の美しい美術品を手放すのを好まなかった。それだけの恩恵にふさわしいと思われる人に譲るだけで、多くは自分の手元に確保したのだった。そのために借りたラフィット街のデュラン＝リュエルの画廊で、彼の並外れた特選品が競売にかけられたときには、彼自身も愛好家もそのことを嘆くには当らなかった。……競売の一つで、鑑定人が光琳の漆の硯箱を25,000フランで出したときには、仰天してしまった。確かに、これほど美しいものがヨーロッパに現れたことはなかった。のちにこの硯箱はグロッセ博士によって、寛大にもベルリン美術館に寄贈されたので、今日私たちはその美しさを堪能することが出来るようになった。しかしそのときは、驚き、怯えたような静寂が競売の呼び掛けに応えたのだった。林はひそかに、それをグロッセに譲ったのである。」(木々康子『林忠正とその時代』筑摩書房、1987年)

この売立ての^{カタログ}目録が、本学中央図書館所蔵の『林コレクション売立て目録』全3冊であり、驚くべき「質」と「量」の日本の美術品が、当時ほかに海をこえて運ばれていたことを示している。第1冊は、1902年1月からの、『第1回売立て 中国・日本美術の部』の目録であり、グロッセが手にいれた光琳の「三輪の硯箱」をはじめ、運慶の「毘沙門天」、笠翁の印籠など計1,647点の作品が収録されている。詳細は次の通りである。

『第1冊』

【木彫】	83点
【漆器】	378点
【陶磁器】	384点
【金工品(刀剣・鏝など)】	443点
【喫煙具・根付けなど】	165点
【絵画類】	
中国作品	4点
狩野派・土佐派・雪村など	76点
北斎などの肉筆浮世絵	114点

同年6月の『第1回売立て 日本のデッサン・版画・絵本の部』の目録である第2冊(写真)は、表紙に磯田湖龍斎の「吉原の女」、見開きに北斎の「詩歌写真鏡・木賊刈」が刷られ、サミュエル・ピングによる「序文」が付されている。「無垢浄光経」や北斎のデッサンなど合計1,796点が競売にかけられたことがわかる。

『第2冊』

【デッサン】	153点
【版画】	
古版画	20点
師宣以後の浮世絵版画	1,187点
【絵本】	
古絵本	14点
浮世絵挿絵本	422点

第3冊は、林が佛蘭西からの全面的な「撤退」を決意して行なわれた1903年の『第2回売立て 中国・日本の美術品・絵画』の目録であり、小阿弥、光琳などの漆器、12世紀詫摩派の「日天月天」、光琳の「寒山拾得」など合計1,743点の美術品が収録されている。

『第3冊』

【仏像彫刻や面】	49点
【漆器】	249点
【印籠】	180点
【櫛】	29点
【陶磁器】	
磁器	42点



北斎「詩歌写真鏡・木賊刈」

陶器	447点
【金工品】	
青銅製品	105点
鉄製品・鏝など	64点
【喫煙具・根付けなど】	252点
【縫画仏像】	1点
【絵画】	
土佐派・狩野派など	117点
浮世絵	208点

なんと多量的美術品が「流出」し、売立てを通じて「散逸」してしまったのだろう。そう嘆く人は多い。しかし、たとえば永井荷風が、これらの『目録』にふれて、『江戸芸術論』で次のように語る時、彼は林に対してまったく異なった評価を下していることになるだろう。

「林氏は尋常一様の輸出商人にあらざることを知るべし。1902年巴里に於て林忠正氏はそが所蔵の浮世絵並に古美術品を競売に附するに際し浩翰なる写真版目録を出版せり。此書今に至るも猶斯道研究者必須の参考書たり。

林氏は維新後日本国内に遺棄せられし江戸の美術を拾ひとて之を欧州に紹介し以て欧州近世美術の上に多大の影響を及ぼしめたる主動者たりというべきなり」

以下しばらく、明治の激動期に「東西美術の架け橋」として生きた林忠正の足跡を追ってみることにしよう。

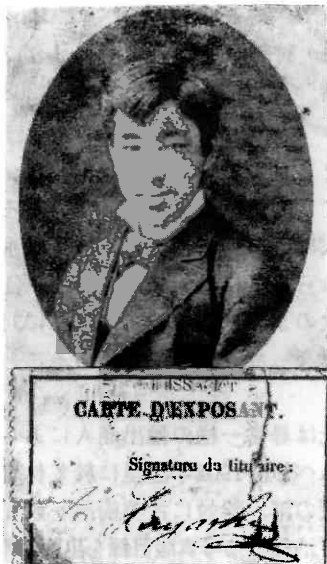
1878（明治11）年1月29日未明、林は横浜港を出航し、佛蘭西に向かった。目的地は巴里。5月から開催される万国博覧会で、輸出商社「起立工商会社」の「通弁（通訳）」を勤めるためであった。この26歳の青年を、あと7カ月で卒業できるはずの東京大学を中退させてまで巴里へと導いたのは、「先進国佛蘭西の文化」への憧れであったが、彼をその後27年のながきにわたって巴里に引き留めたのは、佛蘭西人の「異国日本の美術」への憧れにはほかならない。「ジャポニスム（日本趣味）」の流行が、巴里に「林商会」を開設させ、彼を「日本最初の美術品輸出商」にした。

佛蘭西における日本美術、特に浮世絵への熱狂は、1867（慶応3）年のパリ万国博覧会を主要な発火点とする。しかし、その兆しは、もっと早い。たとえば、銅版画家ブラックモンが、「磁器を送る際のつめ紙に用いたと思わ

れる一冊の漫画集」（『美術と装飾』1905年1～2月号）つまり『北斎漫画』を「偶然に」発見したのは、すでに1856（安政3）年のことであつたし、1856年から1862年までの間（ルイ・オーベール『日本版画の大家たち』1914年）には、すでにドソワ夫妻がリヴォリ街に東洋美術店「ポルト・シノワーズ（支那の門）」を開設していた。それにしても、この『北斎漫画』の「偶然の発見」をめぐる有名な「神話」ほど、浮世絵が異国の芸術家に与えた衝撃の「強さ」と、浮世絵が母国の人々に受けていた仕打ちの「冷たさ」とを物語るものはないだろう。母国日本では「ただ同然」「紙屑同様」であった浮世絵版画は、ボードレール、ゾラ、ゴンクール兄弟といった文学者や、ホイッスラー、マネ、モネ、ルノワール、ドガといったおもに印象派の画家、そして、ビュルティなどの美術評論家にとっては、貴重な「新しい美の可能性」であったのだ。

1867（慶応3）年のパリ万国博覧会は、くすぶっていた火種に一挙に油を注ぐことになった。浮世絵が賞賛的となったが、それは日本側の出品者の思惑とはまったく異なっていた。なぜなら「版画に対して、多分、日本使節団は、ほとんど価値を置いていなかった。というのは、当時の日本で版画は二流芸術、庶民芸術として考えられているにすぎなかったからである。しかしながら、西欧の多くの芸術家と文芸家の心を最もよく、最も永く打ったのは、この版画だったのである。」（ノエル・ヌエット『エドモン・ド・ゴンクールと日本美術』、瀬木慎一『日本美術の流出』、駸々堂、1985年による）

「熱狂は全てのアトリエを、導火線を伝う炎にも似た速さで包んだ。人々は構図の意外さ、形状の巧みさ、色調の豊かさ、彩やかな絵画効果の独創性ととも、それらの効果を得るために用いられた手段の単純なことを賞賛して飽きることを知らなかった。」（エルネスト・シェノー「パリの中の日本」、『ガゼット・デ・ボザール』18号、稲賀繁美訳、「浮世絵と印象派の画家たち展」カタログ、1979年による）



1878年パリ万国博「通行証」

1878（明治11）年当時、すなわち林忠正が渡仏したころの「ジャポニスム」が必要としていたのは、日本の美術についての深い知識と、その知識を佛蘭西人に正確に伝えることのできる語学力であった。林忠正は、幸運にもその両方を兼ね備えていた。美術についての知識は「起立工商会社」の副社長若井兼三郎のもとで学び、仏語は大学南校（東京大学の前身）で学んでいた。彼は、1889（明治22）年には、都心のリュウ・ド・ラ・ヴィクトワールに「林商会」を設立し、多くの顧客を獲得した。もっとも、すでに述べたように、彼は単なる「美術商」ではなかった。「巴里府ニ美術商店ヲ開設傍美術鑑定ヲ業トシ、又仏人刊行美術雑誌ナラビニ新聞類ノ記者トシテ美術上ノ評論ヲ業トシ、爾来今日ニ至ル」という彼自身の「履歴書」が示すように、ルイ・ゴンスやエドモン・ド・ゴンクール の著作に協力し、1886年には『パリ・イリュストレ・ル・ジャポン（絵入りパリ誌日本特集号）』を執筆している。

それにしても、林忠正が「輸出」した美術品の「量」と「質」は、驚くべきものである。渋井清の「浮世絵の輸出」（『三田文学』昭和14年2月号）によれば、「荷送り」の詳細は次のようであった。

「荷送り」回数

1890（明治23）年	14回
1891（同 24）年	22回
1892（同 25）年	10回
1893（同 26）年	28回
1894（同 27）年	23回
1895（同 28）年	12回
1898（同 31）年	8回
1899（同 32）年	8回
1900（同 33）年	1回
1901（同 34）年	2回

なんと計128回、荷箱総数にして860個になるという。そして、商品総数はといえば、ほとんど気の遠くなるような数字である。



1886年「パリ・イリュストレ・ル・ジャポン」

【浮世絵版画】

初期（綿絵以前）	1, 235点
盛期（春信・清長・歌麿）	29, 261点
末期（北斎以後）	125, 991点
巻物仕立	10本
【版木】	20函
【下絵】	97枚
【下絵（卷子仕立）】	1巻
【絵本】	9, 708冊
【肉筆画・屏風・掛物】	846点

一枚物の浮世絵版画だけで156, 487点。いったい林忠正は、これらの「商品」をどのようにして仕入れたのだろうか？

「（林は）東京の留守宅の方でどんどん集めさせ日本へ帰って来てはそれを持って再びパリへ行った。忠正が帰朝するという電報を打って寄こすと、それだけで東京の美術品はぐんと値が上ったという程であった」し、「当時歌麿でも清長でも又春信でも一枚30銭、40銭というのが相場であったが、それを忠正の家では2円3円で買い取った。従って其の浮世絵を買い集める為に多くの骨董屋が全国に走った」と、玉林晴朗の「浮世絵と林忠正」（『伝記聚芳』日本青年教育会出版部、1942年）は記している。

巨万の富を築いた林忠正ではあったが、1900（明治33）年4月15日から開催されるパリ万国博覧会の「勅任」の事務官長に就任するため、美術商の仕事から手を引いた。そして、忠正を欠いた「林商会」は大きな赤字を出した。第1回の売立ては、店を縮小して、その経営を弟萩原正倫に任せる準備であった。しかし業務を任せる予定であった萩原は、第1回の売立ての直前、噂によれば「仕事よりも踊り子たち」が原因で夭折した。「林商会」は後継者を失い、1903年の第2回売立てで総決算せざるをえなくなった。もちろん、当初は「ただ同然」「紙屑同様」であった浮世絵版画が徐々に高騰し、「荷送り」の回数に如実に示されるように、輸出に耐える「良質の」浮世絵が減少したことも、この撤退の理由のひとつではあったろう。

ルーブル美術館の購入担当芸官ミジョンなどは、林が「単なる虚栄のために買い求めるハイカラ族」ではなく「真の価値を理解してくれる愛好者」のために秘蔵していたコレクションが散逸してしまうことを惜しみ、「ルーブル美術館で買い取るよう勧めた」（定塚武敏『海を渡る浮世絵』美術公論社、1981年）が、実現しなかった。現実の売立てはこの第一級のコレクションの大部分を、東洋学者のエルネスト・グロッセの手を経て、現在のベルリン国立博物館東洋美術館の前身である「東アジア芸術収集所」に移動させた。

親日家であったグロッセが林に宛た手紙には、次のように記されている。

「この（売立ての）カタログをいただいた喜びとともに、私は惜念の思いを抱きました。あなたが長い時をかけて選び、作り上げたすばらしいコレクションが散逸してしまうこと、あなたが決定的にヨーロッパから立ち去ろうと考えておられることが、私たちを悲しませるのです。あなたの驚くべき資質を理解することのできた私たちすべてが、どんなに淋しく思っていることか、どうか判って下さい。私たちはあなたのお蔭で、日本美術のすばらしさの何ほどかを味わえる喜びを持つことができたのです。私たちの文化の年老いた堆肥

の上に、優雅な林檎の枝が花を開いたようなものでした。」（前出『林忠正とその時代』）

林は、日本美術を「流出」させたばかりではない。彼はそれと引き換えに、巴里滞在中に「交換・購入」して蓄積した印象派を中心とする「次代を見通した」フランス近代絵画のコレクションを、「一点も売ることなく」日本に持ち帰った。クールベ、コロー、マネ、ルノアール、ドガ、ピサロ、シスレー、ゴーギャンなどの作品は、林自身によって建てられるべき「西洋美術館」に展示される予定であったが、1906（明治39）年の早すぎる死によって妨げられた。それは「帝国博物館」に引き取られることも拒否され、結局1913（大正2）年ニューヨークでの売立てによって、おもにアメリカで散逸してしまった。しかし、黒田清輝の発掘や、日本で最初の印象派絵画の紹介、また1890（明治23）年の講演「日本画の未来」に端を発する外山正一・森鷗外との「近代絵画論争」など、彼の日本での事績を顧みてみれば、林忠正はヨーロッパ文化の「年老いた堆肥の上に、優雅な林檎」の花を開かせたばかりでなく、激動期の日本の美術に対してもひとつの重要な「進むべき方向」を示唆したと言うべきだろう。

（一般教育 美学美術史学専攻）

